

---

# メイドロボのウェディング

織姫音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メイドロボのウェディング

### 【Nコード】

N4739T

### 【作者名】

織姫音

### 【あらすじ】

昔、話題になったゲーム「To Heart」の二次創作です。二次創作の元になった原作は、後に発売された全年齢版やPS版のものではなく、最初に発売された18禁作品のものです。この二次創作の作品自体には18禁な表現は出てこないと思います。（おそらく。ガイドラインについてはまだあまり詳しくありませんので、何かお気づきの点がありましたら教えて下さいませ）

作品本文は1998年執筆。前書き、後書きは2001年に自分の

ウェブサイト公開した当時のものをベースにしています。

10年以上前の文章なので文体が若い！ 自分で読んでいて恥ずかしいです。でも、「初心を忘れるべからず」ということで基本的にそのまま掲載しようと思います。

『まえがき』

Leafという会社の作ったビジュアルノベルゲーム「To Heart」の、マルチというメイドロボットのお話のサイドストーリーになります。

人間に創られた存在の「心を持ったメイドロボット」であるマルチが、試用テスト先の学校で主人公の男の子に恋をするというお話。

彼女はとても優しい子で、自分を元にして生まれてくる妹たちを心待ちにしているような子なのですが、試作機ですので、試用テストが終了したら研究所に帰って、これから製品になる妹たちのために研究されるのが定めなんです。そしてもう2度と世に出てくることはないだろう、という設定。

そんな彼女が、試用テスト最後の日に一度だけわがままをいうんですね。

「大切な人と一晩だけいっしょにいさせて下さい」と。

そして、その次の日には彼女は、何事もなく研究所に帰ってきて・

そこからゲーム内では、話は飛んでしまい、開発者主任らしい謎の白衣のおっちゃん、そうとは知らない主人公がそれとなく話すシーンがあるだけで、発売されたマルチシリーズは彼女のように自由意思を持った優しいメイドロボットではない、ただの機能限定廉価版が発売されて・・・彼女の妹が発売されたら必ず購入すると約束していた主人公はがっかりしてしまう。

そんな主人公の元に届く、一枚のDVDROM。そして、二度と逢えないとあきらめていた主人公のもとに彼女が帰ってきてハッピー

エンド・・・。

簡単にいうとこんな話なんですけどね。

(くわしくはゲームしてください(笑))

なかなか謎めいていて、奥も余韻もあっていいお話なんですけども、それだけに私は、彼女が研究所に戻ってから、主人公の元に戻ってくるまでにいったい何があったのか、どうしても書きたくなくなってしまったわけなのです。

それもゲームの中では黒子としてほとんど出てこない心を持ったメイドロボット『マルチ』の開発者の視点で。

とっても優しく素直でピュアな、彼女を創ったのはどんな人たちだろう。

そんな気持ちで書きました。

素敵な作品「To Heart」を作った人たちに感謝です。

# 1. 『帰宅』

「帰ってきた！ 帰ってきたぞ！！ マルチが！！！」  
隆二が、一晩中へばりついていて四階の廊下の窓から、叫びながら飛び込んできた。

・・・あいつ・・・一晩ずっと外見てたのか。  
その言葉を聞いて開発課全員が外へと向かう。  
・・・結局、誰も帰らなかったな。

私はため息をついた。そして、昨日のことを思い出す。  
昨夜、マルチから最後の電話がかかってきた後、当直を残して帰るように言った私  
に食ってかかってきたのは隆二だった。

「自分は帰りませんよ！ 課長！！！」  
ばん。机が乾いた音を立てる。

「心配なのか？」  
「そりゃ・・・まあ・・・」  
「もしかすると、このまま帰って来んかもしれんぞ・・・」  
「そりゃないっす！」

「ほほう。言い切ったな」  
そう言いながら、心持ち頬が緩むのを感じる。  
「あいつ・・・自分の妹が生まれるのは本当に楽しみにしてました・・・」

自分より大切そうに話してました。そういう奴ですから・・・あいつは「  
ん・・・」

それは、よく、わかっていた……。

「必ず帰ってきますよ」

「そうだな……」

「なら、みんなで迎えてやりたいじゃないですか！」

気がつくくと、部屋にいるみんなは、私たちの会話の行方を食い入るように見つめていた。

言っても聞かん……か。

そう思つて、息を吐いた私に隆二が、最後のとどめを刺したのだつた。

「課長だつて、そうでしょ？」

「負けたよ。お前には。」

「ああ……」

私も出迎えに行つて来るか。

マルチの開発主任になつてから、私もなんとも莫迦になつたものは……と独りで笑いかみ殺しながら、それが心地よかつた。

私が出ていくと、マルチが真つ直ぐにこちらに向かつてくるのが見える。

「主任……」

目が潤んでいる。

「ご心配をおかけしてしまつて、すいませんでした……」

深々と頭を下げるマルチ。

「私は人間の皆さんにお役に立つために創られたのに……いつもご迷惑ばかりかけてしまつて……」

コンクリートの床に、ぼつぼつと目からこぼれ落ちた液体が痕あとをつくる。

「いいんだ……いいんだよマルチ。さ、中に入ろう……」

頭をなでてやる。

「あ、ありがとうございますう・・・わ、私・・・」  
顔を赤く染めて、なお涙の止まらないマルチを見ながら、私は心が和むのを感じていた。

そう。

この子には許してあげると、こちらの方が嬉しくなってしまう、温かくなってしまう「何か」がある。

「・・・セ、セリオさんなら、こんなこと・・・」

課のみんなに取り囲まれながら中に入っていくマルチの声が途切れ途切れに聞こえる。

確かに・・・セリオならこんなことは決まてない。

いや、「できない」

マルチに「自由意志」を植え付けたのは・・・私たちだ。

決められたからではなく、「好き」だから・・・。

そんな自分の意志で働いてくれるメイドロボットがいたら・・・どんなに嬉しいだろう。

「義務感」ではなく「心」から尽くしてくれたら、どんなに楽しいだろう。

そんなコンセプトからマルチは生まれた。  
だが・・・。

それは間違っていたのかも知れない・・・。

それどころか、私たちは、取り返しのつかないほど残酷なことをしてしまっただけではないだろうか。

さつき、頭をあげたマルチの顔に何度も何度もこすられた涙の痕をみつめてから・・・私はそんな想いが頭から離れなかった・・・。

「もう少しだけ、大切な人のそばにいさせてください・・・」



・・・か。

昨夜掛かってきた電話でのマルチの声を思い出すと不意に目頭が熱くなる。

私は慌てて涙をこらえると、珍しく早朝から騒がしい所内へと入っていった。

## 2. 『眠り』

所内に入ると、マルチは既に眠りについていて、  
というより、所内に入らないや電池が切れたらしい。

それから、すぐさま解析作業が始まっていた。

まもなく解析が進み、いろんなことがわかってきた。

マルチの中での心の葛藤・・・相手の「彼」の優しさ・・・そして、  
彼らが結ばれたこと・・・。

外泊を許した時点で予想していたこととはいえ所内では物議をかも  
していた。

「だって！ 彼は本当にマルチを愛していたのよ！」

「そんなことはわかんねーな！ 前回のバックアップの時に、奴が  
充電中のマルチにイタズラをした証拠が残ってるんだぜ！ そんな  
奴の・・・」

とりわけ聞こえてくるのは、まいか舞花と隆二の声だ。

所内でもとりわけ気の強いことで有名な舞花と、お喋りで押しの強  
いの隆二は顔を合わせると、いつも喧嘩をしている。もう名物であ  
る。

「でも今回は違うわ！ だって、マルチが背中を流そうって言った  
とき、彼断ってるもの！ 昨日はあの子を・・・マルチをずっと普通  
の女の子のように扱ってるんだから！！」

「なんで、そんなことそこまで言い切れんだよ！」

舞花は、ふと・・・気持ちを抑えるような表情をした。

そして覚悟を決めたように、きつと隆二を睨むと、抑えた静かな声  
で話し出す。

「・・・彼・・・最後までマルチの『意志』を聞いていたのよ。」

いいか?』つて。一度も命令しなかったのよ……それがマルチにもわかったから……だから……」

こらえきれずに涙が溢れた。そしてもう言葉が続かない。

「……」

隆二はもう何も言えなかった。

ふう……。

男の嫉妬ってやつも入っていたんだろうな……。

舞花の言ったことぐらひは、隆二にもわかっていたはずだ。

マルチと「彼」の「行為」は、まったく自然なものだった……。

「好きな人を喜ばせてあげたい……」

その行き着いた先がセックスだった……。

本来、セックスとは、そういうものだったのではないのか……。

私たちには、もう既に何も言う資格はないのかもしれない。

そういう純粋な心を忘れてしまった私たちには、彼らの「自然」な

「行為」をどう

こつという資格はないのかもしれない……。

ふう……。

私はもう一度ため息をつくど、席を立った。

「マルチとセリオのデータも出そろったことだし……私は企画本部長のところに行って来る。みんなは自分の持ち場で引き続き解析を続けておいてくれ」

だが、来栖川電工中央研究所のビルに入って企画本部に着いた私を待っていたのは、大川本部長のいつもとはまるで違う高圧的な大声だった。

「長瀬君。それは以前にも言ったはずだ！ ロボットに『心』が必要なわけがなかるう！ 莫迦をいっちゃいかん」

それは話がセリオの製品化の話からマルチに話題が移った途端だった。

ふむ……。この態度の豹変は……。何か有ったな。そう思いながらも、私も自分の立場上の反論を試みる。

「ですが……」

だが、それすら許してはもらえない状況らしい。

「メイドロボットに必要なのは『より多彩な機能』だ！ 違つかね？！」

苦しそうにすら見える本部長には悪いのだが、私にも後に引けない理由があつた。状況にも……。そして「心」にも。

「しかし融通性というものもあります。現に、既にメイドロボットを導入している大手企業のサラリーマンなどの間で、親和性と融通性の点で疑問視する声が……」

「長瀬君……!!」

泣きが入っているらしい。

わかってくれと言わんばかりの、それでいて理屈を吹き飛ばす大声が響く。

「……はい」

不承不承というのが見えるように返事をする。

「親和性はデザインの領域で何とかなるはずだし、融通性はアルゴリズムの改良で……」

「いくら分岐を増やしても、相手の意図を、心を、くみ取ることができなければ意味がないのです……」  
沈黙が流れる……。

ふう……仕方がない。とでもいうように居住まいを正すと、大川さんは更に威圧的にこう言い放った。

「長瀬君。キミの言いぐさでは、みすみす自分たちの無能さをさらけ出しているようにも聞こえる！ そうだろう！ そうは思わんかね！」

「……」  
返す言葉もない。

「いや……すまん。少し言い過ぎた……」

……しばらくして緊張がほぐれると、大川本部長は苦々しそうな表情で語り始めた。

「実はな……ここだけの話にしてもらいたいのだが……」  
「……わかりました」

「聞きつけた厚生省そして警視庁の方から圧力がかかっているのだ……。ロボットが「心」そして「自由な意志」を持ったときの、治安と風紀……その他諸々への懸念でな……。ずっと娘のように開発してきた君らには、本当に申し訳ない……とは思いが……」  
そして、こう結んだ。

「すまんが……どうか汲んでくれ」

つまり、どうにもならん。諦める。ということか。

それは静かだが有無を言わさぬと言つ態度だった。

私は形式張つて、礼をすると、無言で部屋を出た。

#### 4. 『 思案 』

「どづいうことなの!!」

「どづいうことなんですか!!」

食ってかかったのは、やっぱり舞花と隆二の2人。今回は共同戦線らしい。

私は表情を殺して、一息で言った。

「「心」及び「自由意志」を持ったメイドロボットもしくはアンドロイドの制作は凍結される・・・本社の指令だ」

「どづして?! 納得できる理由を聞かせて下さい!!」

泣きそうなのを歯を食いしばって舞花が机を叩いた。

「命令に理由がいるのかな?」

私も酷い奴だな・・・。少し自己嫌悪を覚える。だが表情には出さない。

「だから、言ってるじゃないですか! 納得いかないって! 僕らの苦労とは言いません。マルチは・・・マルチはどうなるんですか!!」

私を睨みつける隆二と舞花。

このプロジェクトには、驚くほど純粋な者達が集まった。だからこそ、彼女のようなメイドロボットが生まれたのだろう・・・それは疑いの余地がない。

「それは・・・治安への懸念・・・ですか?」

後ろから、もう一人のセクションチーフ、恵が誰に言つともなくそ

う言っ。

私と、恵と隆二と舞花・・・。

実際にはこの4人でマルチを作り出した、と言ってもいい。後の者達は、それを形にするために、私があらゆるところから集めてもらったエキスパート技術者たちである。

「鋭いな。はつきりとは言えんがそういうところもある」

この子は、普段、引っ込み思案で無口だが、言うときは言うところも持っている。それは四人のバランスを取っていく上でとても助かっていた。

「それで課長は引き下がってきたんですか!？」

「やめましよう、隆二さん」

恵は私の気持ちを察したのだろう。だが、隆二の感情は収まらなかった。

「いえ、言わせて下さい!! そんな治安への不安なんて、マルチを見せれば一遍に無くなります! みんなも言ってたじゃないですか! こいつが発売されれば、世の中平和になるって! こいつのヒトの良さが治安を乱すような要因になるとは・・・」

「だからだよ」

私は、隆二の台詞をぶった切った。

「は?」

隆二を始め、みんなきよとんとした顔になる。

「だから、引き下がってきたんだ」

・・・。

みんなの視線が説明を求めて私に集まる。



自分の『思い』や『考え』は機密にはあたらないだろう。  
私は話し始めた。

「今は『心』のない時代だ。『心がわからない』時代と言ってもいい。ファーストフードのヤツクにでも行ってみる。形だけの『心』の裏付けのない笑顔を張り付けた人形がいっぱいだ。彼らは人間なのに、あそこにいるときだけは『人形』になる。『心』のない『人形』に。そして、それを『笑顔が有って、対応の優れたマニュアル接客』というのだそうさ。わかるか？ 今は、みんなが『心』の価値を見いだせない時代なんだ……」

私は、祈るような気持ちでみんなを見回した。

「そんな世界の中にマルチのような子を送り出してみる。いいように利用され、騙され、濫用され、悪用される。虐げられる！ それでも人間を好きであり続けるあいつらが、どんな『心の痛み』を感じると思う！ 人同士の『心』すら、『痛み』すら、思いやれない人間たちに、どうしても、メイドロボットの心の痛みをわかってやれるというんだ!？」

みんなが、学校でいいように利用されているマルチを思い出しているのが、手に取るようにわかった。

もう、誰も何も言わなかった。  
いや……言えなかった。

私は、心を静めて、さとすように、みんなに語りかけた。

「わかるか……？ マルチを、あの『心』を持ったマルチを受け入れるには、人間はまだ早すぎたんだよ。開発を始める前に、それ

がわからなかったのは開発者としては不幸だが・・・発売する前にわかったのは、マルチ達にとっては幸運だったと・・・私は思うよ・・・」

みんなが同意してくれているのが雰囲気であった。ただ、ひとつだけの気がかりを除いては・・・。

しばらくして、それを口にしたのは恵だった。

「じゃあ・・・じゃあ・・・マルチはこれから・・・」

そのまま、涙が止まらなくなってしまったらしい。

言葉にならない。

そして、まるでお通夜のような風が重苦しく漂った。

そんなみんなを見ながら、私は、本当は後から話そうと思っていたことを少し切り出すことにした。ぬか喜びにならないことを祈りながら・・・。

「私に少し時間をくれないか・・・それについては考えがあるんだ・・・」

みんなが救いを求めるような目で私を見る。

声を潜めて、加えて、なるべく茶目っ気を出して一言付け加える。

「個人的な・・・だがね」

明くる日の夕方、私は研究室の白衣のまま、表に出かけた。

表。

そう、マルチが通っていた高校から、少し離れた公園。マルチのデータに残された『帰宅中のメモリー』にあった『彼』と一緒に帰った記憶。その中のいつも通った公園……。ここにいれば『彼』に会えるはずだった……。

私は確かめたかった。

『彼』がメイドロボットに何を見ているのか。何を感じているのか……。

その為には、マルチの開発者としてではなく、見知らぬおっさんとして会う必要があった。それも、好感を持てるというよりは、わけのわからん冴えないおっさんとして……。

「……まあ、好感を持たせるよりは楽だろう」

そんな独り言を呟くと、私は、公園のハトにエサをやりながら、ずっと「彼」を待ち続けた。

そして……。

「彼」は来た。

「やあ、どうですか、あなたも？」

『彼』は、何か考え事をするかのように、ぼーっと歩いてきた。あるいはマルチのことでも考えていたのかもしれない……。

「どうですかって、ハトのエサやり？」

そう思わず言ってしまうから、自分で驚いているふうだった。

「そうそう。ハトは平和のシンボルですからね。大切にしなきゃいけません」

ははは。自分で言いながら、苦笑しそうになる。私もよく言う・・・。

2つ持ってきていたハトのエサのうち1つを半分無理矢理手渡す。渡されてしまったからには、その場を離れるわけにもいくまい。果たして、私の思惑どおりに、彼はしぶしぶその場に腰を下ろした。作戦、第一段階はまず成功だった。

これで、やっと『彼』と話ができる・・・。

「いやあ、それにしてもいい天気ですねえ。今朝方はちょっとパラついてましたけどね」

せむせむし世話噺のとっかかりは天気の話題に限る。

この時間を作るために、今日の仕事のあらかたを昨日徹夜で済ませた私には、とりわけ、それだけの返答を「彼」に期待したい気持ちでいっぱいだった。

朝方眠たい目を擦りながら、拝んだにわか雨。

少し、やつかみが入ってるのかもしれない・・・。

表情に出さないように気をつけながら、そんなことを思った。

お前の返答にマルチの未来がかかってるんだぞ、と。

「はあ・・・」

そんな私の思惑など知るわけもなく、面白くもなさそうに上の空でエサをまく『彼』。

私は続けた。

「あんまりいい天気なもので、会社を抜け出てぶらぶらしているんです」

これは半分嘘だ。  
いつもは、そうなのだが、今日は違う。  
だが、今はそんなことはどうでもいい。  
私は本題に入った。

「ま、どうせ会社に戻っても何もすることはないので。．．．  
仕事はみんなロボットに取られちゃいましたね」  
能率ばかりを重んじて、心がない職場。そんな中では、感情も失敗  
もないロボットにさえ人間は劣るだろう。そんなロボットたちを快  
く思っていない人たちが増えている．．．そんな話もあちこちから  
伝え聞いてもいた。

「ロボットに？」

「ええ」

そう。

そんなロボットと働いても『楽しくない』のだ。  
彼らには『感情』がない。『心』がない。  
それなのに仕事の能率では人間はかなわない。  
憎らしくなって当たり前だ。

一緒にいて「楽しい」「親しみの持てる」そんなロボット。  
能率を効率を落としても、心を分かち合えるロボット．．．。

私の会社は．．．そして社会は、それを理解できなかった。

『彼』は、どうなのか。

マルチを受け入れた『彼』は．．．。

それが私の最後の賭だった。

「最近、最新型のなんとかってというのが会社のほうに導入されましてね。・・・ホント、ロボットは、よく働きますねえ。・・・なんでもテキパキこなすし、早いし、ミスもない、おまけに残業だって文句を言わずやっちゃうし。いやー社員の鏡ですよ。私たち人間の社員は、このままどんどん用済みになってリストラされていくんでしょうかねえ」  
ハハハ・・・なんぞと笑って見せる。

最初、私はそうは思わなかったのだ。  
人間とロボットが対等に協力しあう・・・。  
そんな夢を描いていた。

だが現実とは違った。  
あの高校でさえ、マルチと一緒に苦労を分かち合おうとしたのは、  
今、目の前にいる『彼』だけだったのだから・・・。

そんな情熱が表に出そうになって、私は慌ててエサをまいた・・・。  
バサバサバサ・・・。  
ハトの羽音と舞った土埃がそんな一瞬の表情を消してくれることを  
願いながら・・・。

そして、更にこう続けた。  
「でも、じつはわたし、ロボットってやつがあんまり好きじゃない  
んですよね・・・」  
仕事を取られた逆恨み・・・そんなサラリーマンを演じることで、  
最後の核心の問いかけを、少しでもさりげなくしたかった・・・。

「なんで？」  
そう聞く『彼』

「いや、仕事を取られた逆恨みつてのもありますが、それよりもやつぱり連中って機械でしょ？　なんていうか、こう、そんな心のない連中が溢れて出て来ると、世の中つままなくなっちゃうっていうか、文句ひとつも言わない連中が黙々と働く光景は、あんまり気持ちのいいもんじゃないですよ」

それは私の本心でもある。  
その思いからマルチが生まれた。

「せめて、連中にももう少し、人間らしい心があればいいと思いませんか？　仕事終わりに飲みを誘いたくなるくらいのこと……。そうすれば今の職場も少しは楽しくなるんですけどね」

彼が、マルチのことを思い出しているのは、明らかだった。

「そうだろうな……」

『彼』は、微笑んで、確かにそう呟いた。

それを確認すると、更に話しを核心に近づけていく。

これは、いわゆる誘導尋問ってやつだが、「彼」は、私を通りすがりのおっさんと、まだ、信じてくれているらしい。次はさりげなく事実を話す。

「……でもね、最近こんな話を上司に話したら、笑われたんですよ。ロボットには心なんて必要ない。必要なのはより便利な機能だ」と

大川さんだけではない。本社企画部の大半がそういう意見なのは知っていた。

セリオは企画部の出したコンセプト、マルチは研究部の出したコン

セプトだったのだから。

「まあ確かにそうかもしれませんが。ロボットはしょせん人間の道具なんですから。人間らしいロボットなんて、結局なんの意味もないんですよ」

昨日の晩、仕事を片づけながらずっと考えていた、そんな自嘲的な考え。

それを投げてみる。「彼」にそれを否定して欲しかったのかもしれない……。

「デジタル時計をつきつめて、究極的な疑似アナログ時計を作ったところでそこに何の意味があるか」というと、作り手の満足だけで……」

気がつく、「彼」は、手を止めてこっちを見ていた。

どういったらいいのだろう……。一言では言えない顔をして……。

その顔に思わず見とれてしまった私は、「こほん」と咳払いをひとつして苦し紛れに「あーいや失礼……」と、ごまかすと、すぐさま核心の問いを発することにした。このまま「彼」と話していたら、思わず身元を明かして、彼とマルチのことについて話したくなってしまういそうな気がしたからである。

私はもう邪魔でしかないハトの工サ袋をポケットに突っ込むと、おもむろに……。

「……で、あなたはどう思います？」  
と、切り出した。

それは、マルチにとっても、私たちにとっても運命の問い。



私と開発者全員の夢、マルチ自身の夢をのせた最後の問い。

「ロボットに『心』は必要あるのか、ないのか」

「彼」は黙っていた。

もうバレてもかまうものか。

私は開き直って、更に聞いた。

「あなたはどう思います？」

複雑な表情が絡み合った後・・・『彼』は笑った。  
そう、にっこり笑ったのだ。

「あつたほうがいいに決まってるじゃねーか」

私は何も言えなかった。

あまりに、シンプルな「彼」の言葉が心に響いて。

ぶっきらぼうだったが、それだけに「彼」のマルチを思う気持ちが  
いやというほど

伝わってくる。

黙っている私に「彼」は、更に追い打ちをかけて。

「そっちのほうが楽しいに決まってんじゃねーか」  
再びそう言った。

私は、感動していた。「楽しい」・・・そう「心」があるから楽しい。  
い。

その答えのシンプルさに。

それは、マルチと本当に心を分かち合った者にしかわからない感情  
なのかもしれないな。そう納得する。そして、微笑むと。

「やっぱり、そうですねえ」  
本心からそう言った。

それは……。

やっぱり、『彼』は私たちと同じだった。

そういう意味でもあった。

そう。

『彼』は私たちと、同じ『心』を持っていたのだ。

……心の中で一つの決意が固まるのを、私は感じていた。

## 6 . 『 継 承 』

「今日、『彼』に会ってきた」  
隆二、舞花、恵の3人を課長室に呼ぶと、私は何の前置きもなくその切り出した。

「ただ、マルチの開発者としてではなく、一個人としてだ」  
それが、私が前に言った『考えていたこと』だと察知したのだろう。  
3人は静かに頷きながら、私に話を促した。

「私は『彼』に聞いた。ロボットに心が必要あるのか、ないのか、とね」

「で、彼は何て？」  
神妙に訪ねる舞花。

「あつたほうがいいにきまってんじゃねーか」  
「へ？」

変な声を出したのは隆二だ。  
恵は後ろで笑いをこらえている。

「そつちのほうが楽しいにきまってんじゃねーか、だそつだ」

くく・・・っ・・・。

耐えきれないように舞花が叫んだ。

「なにそれ〜」（笑）

「シンプルだろう・・・？ 私も正直驚いたよ。もし・・・ロボットが人間と協力しあえる、そんな日が、もし来るとしたら、その時

代は『彼』のような奴らが作るのかもしれんな……」

みんなが笑顔で頷く中、隆二がひとり横を向いて……。

「ちえ……なんだよ……」

そう吐き捨てるように呟いた。

「で、私の結論だが……」

みんなに、さっと緊張が走る。

「マルチを『彼のところに嫁がせよう』と思う」

しばしの沈黙……。

「だが、これはあくまで私個人の意見だ。君たちの意見を聞きたい」  
そう付け加える。

「お嫁さん……か。ふふふ……マルチは私たちの娘ですもんね  
！」

舞花が嬉しそうにそう言う。

「もちろん、ただでとはいわない。彼にはちゃんと正規のルートで  
マルチを購入し  
てもらったの話だ」

マルチプロジェクトが廉価量産型として再立ち上げされるとい話  
は、昨日の企画会議で既に決定されていた。

「結納金ですね」

恵も嬉しそうに微笑む。

「隆二……反対か？」

一人渋い顔をしている隆二に水を向ける……。

「マルチをあんな奴のところには嫁がせるなんざ・・・って言おうと思っただけだな。考えてみたら、あいつの人物関係の基本アルゴリズムは俺が組んだんだよな。ヒトを見る目がないわきゃないよな」

それを聞いて、ふん、と鼻で笑ったのは舞花。

「なーに言ってるの！ あんたの組んだのが、さんざんリメイク出された拳句に、恵ちゃんほとんど手を入れたの、私、ちゃんとして知ってるんだから！」

「あーお前そう言うこと言うわけ！！」

「言うわよ！！」

「待つて」

恵の鶴の一声。

「マルチの自由意思発生装置は、作動した瞬間から、誰のものでもない彼女自身の意志を作り出すんですもの。私と隆二さんが作ったのは、初期設定に過ぎないわけでしょう？」

更に私が続けた。

「だが、これだけは言える。私たちはマルチという子をよく知っている。例えばプログラムされた選択じゃなくても、あの子のヒトを見る目は確かなはずだよ」

「だって！ あんなにいい子なんですもんね！！」  
舞花が嬉しそうにそう付け加える。

「でも、幼児学習期での性格の受け継ぎは確かにあるよな」  
「そうね・・・」

「向こう見ずなところは絶対舞花似だよな！」  
と隆二。

「何よ！ あんただって失敗の多いところなんかそっくりじゃない  
！」  
言い返す舞花。

「でも、責任感が強いところは舞花さん似ですし、隆二さんの  
喜びを分かち合いたいっていう純粹なところも……」  
また喧嘩になりそうな2人を恵が取りなす。

「ちゃーんと恵ちゃんも、あるじゃない？ 全てに弱気なところと  
か……いてっ！ 何すんだよ舞花!!」  
「でも、ちゃーんと恵の優しいところも受け継いでるもんねー」

きゃぴきゃぴと盛り上がっていると、不意に隆二が思い出した  
ようにこう口にする。

「とじろぞれ」

「あん？」

「はい？」

静かになる3人。

「主任に似てるところって……どこだろ？」

「え……」

「それはあ……あれよ」

口ごもる舞花。

「時々わけわかんないことをする……」  
舞花が言うと隆二があつと声を出す。

「意味不明なところか!!」

爆笑する舞花と隆二。

恵も口元を抑えて、くすくす笑っている。

こほん。

私は、軽く咳払いをすると。

「じゃあ、いいんだな？」

最後にこう聞いた。

3人は各々こちらを向くと一転して真剣に頷く。

それからの話は、表沙汰にはできない話になった。

マルチのデータはプロジェクトが凍結されたとはいえ完全に機密扱いだからだ。

ここにいる4人で、秘密裏に処理しなくてはならない。

だからといって「彼」を特別扱いしたら、きっと不審に思われるだろう。そこが難題だった。

メイドロボットは完全メーカー発送だから、本体は問題ない。問題は本体登録とユーザーサポートだ。激論の末、最初の発送ではマルチのパーソナルデータは、封印した状態で、出荷し、ユーザー登録がなされた時点で解除のDVD-ROMを同時発送することにした。

こうすれば、私たちの手で登録されれば、マルチは覚醒し、万一、普通のユーザーサポートへ紛れ込んでも、その時は、その登録をダミーにして、こちらで独自に登録すればいい、という判断からだ。

「あと・・・問題は彼がマルチシリーズを本当に買うかどうかだけ

だ  
私は言った。

「買うに決まってるじゃない！」  
と舞花。

「・・・でも、実際発売されるマルチは・・・」  
やっぱり恵は不安そうだった。

「そんなこと関係ないさ！ あいつ言ってたじゃねーか。『約束』  
だって。だから必ず買うさ。あいつはそういうやつだと思う・・・  
俺、絶対そう思う・・・!!！」  
隆二が真顔で確信に満ちた口調で、そう言い放つ。

「へえー。さつきまでみつともない男の嫉妬に狂ってた、あんたが  
それを言うかねえ」  
からかう舞花。

「あー?! 喧嘩売ってんのか舞花!!」  
顔を真っ赤にしてわめく隆二。  
「二人ともストップよ、ストップ！」  
止めに入る恵。

そんな彼らを見ながら、私は何か温かいものがこみ上げるのを感じ  
ていた。  
いいスタッフに恵まれたな。

それも「マルチだからこそ」という気にすらなってしまう。

・・・本当にお前は不思議なやつだよ・・・マルチ。



## 7. 『 結 末 』

そして月日は流れ……。

「彼」は、マルチとの約束通り、量産型のマルチを購入した。

しかし、それからも、購入したマルチが表面上、量産型であったことに気落ちしたからか、「彼」からのユーザー登録が遅れてやきもきしたり、特別色を廃するためにはわざわざ事務的に書いている手紙に隆二が『私たちの娘』という文句を入れると言って聞かなかったり……いろいろあるにはあったが……。

それでも、やっと、最後のDVD-ROMを発送する時が訪れた。

これを発送すれば、取りあえず、『あの』マルチは私たちの手を放れることになる。そして、『彼』のメイドロボットとして目覚めることだろう。

それは長くマルチを娘同然に育ててきた私たちにとっては感慨深いものだった。

文字通り娘が嫁にいくのを見送るような……。

「行っちゃったね……」

「そうだな」

「彼……驚くでしょうね」

「マルチもな……」

「でも、マルチにくらい教えてあげてもよかったんじゃない……」

「そりゃ野暮つてもんだよ」

「どつして？」

「昔からお姫様が目覚めるのは、王子様のキスと相場が決まってる」

「私たちはもうお呼びじゃない・・・か」

「第一、そのほうが感動的じゃないか」

「ふふ・・・そうね」

「・・・」

「どうした？」

「本当にこれでよかったんでしょうか・・・」

「・・・」

「・・・わからんさ。神ならぬ我が身にはね」

「・・・」

「ただ・・・」

「ただ？」

「神様も特別に許して下さいさ・・・あの2人なら、きっと・・・」

「・・・そうですね」

「ん・・・」

「そうだな」

そう話し終わると、私たち4人はそれぞれ思い思いに窓際を離れた。

『彼』とマルチの幸せを祈りながら。

そして、メイドロボットたちの未来に想いを馳せながら・・・。

<FIN>



## 『あとがき』

後書きです。

そうですねー。これは私が1998年くらいに書いたお話になります。

この「To Heart」というゲーム、文章を読みながら選択肢を選んでいくことによっていろいろな女の子のシナリオを読んできくことのできる「ビジュアルノベル」と言われるジャンルなのですが、私はこの作品の中の「マルチシナリオ」（メイドロボット”マルチ”のシナリオという意味です（汗））がもっとも好きでした。個人的に思うところも多く、当時読み進めながらにボロボロ泣いてしまったのを覚えています。

「自由意思」「義務」「ロボット」・・・たくさんのキーワードがありますが、丁度その頃、なんだったかな、就職試験の研修みたいなを受けに行ったときの文章問題で、マクドナルドのマニュアル接待を持ち上げてる文章があっただんですが、私はこれを読んで「うえ・・・勘弁してくれよ」と思ったんですね。

（理由は本文中に書いてあります（汗））

そんなふうに現実でリアルタイムでいろいろなことに遭遇したり、考えたりしていた頃だったので、どうしても何か形にして残しておきたかったのかもしれない。その時出入りさせて頂いていた「マルチのおうち」とさんというマルチのファンクラブのホームページに掲載してもらった文章ということと二週間ぐらいで書き上げました。

今、自分で読み返しても、その時、自分が考えていたこと思ったこととは鮮明に蘇ります。

サイドストーリーとしてではありましたが、自分としては思っていたことが思う存分言えた文章ということで、思い入れの深い作品ですね。今も私の想いは基本的に変わりませんし……。

（文体が拙い＆若いのでちょっと恥ずかしいですが（苦笑））

一度、「仕事中に読んで涙が止まらなかった」というメールを頂いたこともありました。

（生まれて初めてのフィードバックですね。嬉しかったです）

私自身、これを書いてから今まで四年余り（2001年当時。今は・もつとです）ね、非人間的サラリーマン生活を満喫させて頂いたこともあり、更に、この中に書いてある『想い』は強くなっていると言えるかもしれません。

いつか……もつと『心』のある仕事場を、お互いを思いやれる生活の場をヒトが手に入れることができるように……。

現代に暮らすたくさんの心有るメイドロボットさん達にこの作品を捧げます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4739t/>

---

メイドロボのウェディング

2011年6月18日12時29分発行